

がんの苦しみとどう闘うか

県病の取り組み

緩和ケアのあるべき姿を求めて

青森県病院事業管理者 吉田 茂昭

緩和ケアは、がんの病態あるいは治療に伴って、患者さんが蒙る様々な苦痛からの解放を目的として開発された比較的历史の新しい診療分野です。

一般的に、がん細胞は、病変が限局した段階での治療に失敗しますと、その増殖能力によって体内各所に散らばった転移巣が増大し、患者さんに様々な苦痛を引き起こします。最も厄介なのが疼痛(痛み)です。どのような人でも四六時中これに晒されると半狂乱になり、自己の尊厳や人間性を失いかねません。そこで「がん末期の疼痛を効果的に制御するととも

に、来たるべき死の瞬間を人間らしく少しでも安らかなものにしよう」という運動が湧き起こり、これが当初の緩和ケアの基本的な考え方となりました。同時に、がん末期によく出現する呼吸困難、易疲労感、倦怠感、さらには死への不安や鬱状態といった精神症状への対応も、緩和ケアの主要な治療対象とされました。

最近では、がん治療の進歩によつて長期の延命が図られる一方で、患者さんが闘病中に様々な症状に悩まされるようになりました。また、治癒が望める限局性の病変であっても、精神



的ダメージや治療に伴う苦痛などに苛まれる患者さんが少なくないという現実も明らかになりました。このような状況を踏まえ、当初の「終末期の緩和ケア(＝看取りのケア)」から、現在は「がんと診断された時から、緩和医療の体制を用意すべ

きである」(WHO勧告)が世界的に受け入れられています。つまり、緩和ケアは手術や化学療法などのがん治療と表裏体の関係を成すものとして、全てのがん患者さんが直面する苦痛から解放する診療分野になったのです。

全国でも珍しい 先駆的な取り組み

青森県立中央病院は、現在様々な緩和ケアに取組んでいますが、その歩みを振り返ると特異な道筋をたどっており、そのことがむしろ今日の発展に繋がったものと思います。

当院では、平成20年度に「がん診療センター」を立ち上げ緩和ケア科を設置しましたが、当時は専門医が不在で、緩和ケアへの組織的対応ができませんでした。しばらくは看護師を中心とするグループが対応するという状況が続きました。

平成22年度に、当時国立がん研究センター中央病院緩和ケア部長の湯先生が本県で講演され、先生から大きな介入試験(疼痛緩和指標としての除痛率の妥当性評価)の構想を伺いました。「それならば、専門医もおらず、緩和ケアの実績もない青森県立中央病院を研究のフィールドにして頂ければ、

介入前後の比較も容易でしよう」と話を向けたところ、「それは一考に値する」と回答を頂き、最終的に当院が選定されて「疼痛緩和ケア」の実践に踏み込むことになりました。

その間、介入研究がスタートする前の基礎的データの作成から始まり、介入後には2万件を超える患者データの解析など、研究の中心を担ったのは当院の緩和ケアグループを中心とする看護師スタッフでしたが、その頑張りに目を見張るものがありました。また、国の研究班との共同研究ということで、全国の第一線で活躍されている緩和ケア専門医の先生方(班員)にも数年にわたって来院頂き、ケアの実践について指導を受けました。そのような御協力・御指導の賜として、「県病方式」とも言える独自の緩和ケア診療システムが構築されました。その内容は、「病棟の看護師が緩和ケアのスクリーニングを担当」し、「各担当医が緩和ケアを実施」し、「治療困難例については

複数の専門医にコンサルト(TV会議)」をするというものです。通常、緩和ケア科を備えている病院では、緩和ケアの一切を緩和ケア科に委ねることが多く、他診療科スタッフとは一線を画してしまつたため病院全体の取り組みになり難いのですが、当院の場合は、がん治療に取組むスタッフ全員が常に緩和ケアと何らかの関係を持つという点で、全国的にも先駆的システムであるという評価を頂きました。

また、本研究には、研究対象となる母集団(本来痛みの介入を必要とする全がん患者数)の把握が不可欠ですが、当院のような総合病院の場合、がん以外の患者さんも多く、その中から対象を抽出する作業は大きな壁となりました。この問題には、当院医療情報部が「がん登録データ」と「カルテ情報」とを二元的に抽出できる「がん患者総合データベースシステム」の開発に成功し一気に解決へと導きました。このシステムでは、何月何日、当院にどのようなが

ん患者さん(がんの種類、病期、治療内容など)が受診しているのかを瞬時に把握できます。同時に、治療上問題を有している症例や、緩和治療を必要とする患者さんがどれくらいいるかというスクリーニングに必要な情報も得られるため、効率的な緩和ケアの介入が可能になりました。

以上のように、長期間の取り組み成果により、今では「痛みのある患者を放置しない、何らかの有効な治療手段を講じる」ことが当院の文化として定着しつつあります。

患者さんには、「治療を受けるのだから多少の痛みや苦しさは仕方がない」という遠慮(＝古い考え方)を捨て、具合の悪いことは遠慮なく申し出てください。ただくようお願いいたします。とは申せ、私共もまだまだ発展途上にあります。今後各方面からの叱咤激励を頂きながら、良質ながん診療の実現に向け、日々診療活動に励んで参りたいと考えています。